

アカデミックデイ 2018・勝手連ポスターへの訪問ありがとうございました（佐藤 恵子）

9月22日（土）の京大アカデミックデイ「研究者と立ち話」における私たちのポスター（『いのち、人体、細胞』をどうする？）には、小学5年生からかなりの先輩まで、多くの方に足を止めていただきました。ありがとうございました。

私たちは、4年前のアカデミックデイでも代理出産や延命治療の中止についてポスターを出展し、来場者の方々とお話させていただきました。このとき、ポスターを前にした井戸端会議的な対話は、目には見えにくい感覚的な部分を聴かせてもらったり、心の底にあるものを共に探ったりするのに最適であると実感しました。その後も、予定の合う年は必ず出展してきましたが、この好機を逃すまいと今年も、人々が身体や組織・細胞などをどのように捉えているのかという身体観のようなものを聴かせてもらおうと思い、参加しました。今私たちが取り組んでいる課題のうち、臨終期の延命治療の問題や、人体由来の試料を用いた研究をする時の問題について、病院での具体的な実践策から社会全体での政策を立てるためには、人々の心の底にある「素朴な感覚」を把握することが不可欠と考えたからです。

そこで今回、2つのテーマについてポスターを作成しました。1つ目は、身体について、「ご自身が回復不能な状態で臨終期にあり、生命維持により生かされている状態だったとしたらどう思うか」についてうかがったところ、対話をしたすべての方が「延命治療は望まない」とのご意見でした。一方で、「仮に家族が治療の継続を希望したらどうするか」については、「息子が生きていてほしいと言うのであれば、それでよい」という親の立場からのご意見があったように、家族の意向を重視してほしいという人もいました。また、「自分が死んだ後の身体についてどう思うか」については、「ただの物質」という人や、「家族に属するもの」という人、「自然から譲り受けたもの」「土に帰るもの」など、さまざまな意見が出ました。みなさんのご意見を聞いていると、自分の身体についてご自身の意思はあれど、家族の意向を気にする人も多く、日本では本人の自己決定だけでなしに家族の気持ちにも配慮して、家族も含めて納得を得ることが重要であることが確認できました。

また、健康なうちから臨終期の過ごし方や自分が大事にしていることについて考える機会を促す目的で制作したマンガ冊子「生き逝き手帖」をお渡ししたところ、みなさん「いいですね」とおっしゃってくださり、ちょっぴりいい気になりました。

2つ目のテーマとして、大学病院で手術を受けたことを想定し、「手術で切除した組織や細胞を研究に利用してよいか」と声をかけられたらどうするかたずねたところ、ほとんどの人が「とくに許可を得ることなく使用してよい」、または「組織や細胞を使って研究を実施しているということが伝えられて、拒否できる機会があればよい」を選択しました。さらに、別の設定として、「さまざまな研究のために血液を提供してください」と依頼されたら協力するかという問いかけに対しては、半数くらいの方が「目的を知らせてもらえば提供する」とのことでした。人体試料などを研究に使用される際の懸念としては、「クローンなどの不気味な研究には使わないでほしい」がもっとも多く、研究者に望むことは、「意義のある研究をすること」、「大切に扱うこと」、「自分達でルールを作って規制すること」などを多くの方が選択しました。「研究者は、やりたいことやるのが研究者でしょ」、「研究者が自分達で作るルールも、自分達に都合がよい内容では困る」などのご意見もいただきました。私たちは今、人体試料を用いる研究のガバナンスのあり方を検討し

ていますが、みなさんのご意見を伺うと、それほど的をはずしていないことが推察できてよかったです。

新しい技術は便利ですが、人間が使い回されるのではなく、うまく使いこなすには、思想とそれに基づいた実践策が必要であり、これらを考えるには、市民から研究者まですべてのステークホルダーから、「生活者としてどう考えるか」を聴かせてもらうことが必須です。アカデミックデイに足を運ばれる方々は、科学や研究に興味があり、一般市民よりも意識が高いという傾向があるとは思いますが、みなさん真剣に考えて答えていただけて、情報をわかりやすく説明すること、普段はあまり考えないような部分も考えてもらえるように問いかけること、そして気持ちを探りながら対話することの大事さと楽しさを再確認しました。

私たちの活動が重要であるとおっしゃってくださった人も多く、「やったるでえ」というやる気も湧き、誰からも頼まれてはいなくても、あれこれ勝手にやることの意義も確認できて、大いに励みになりました。そして、私たちの今後の活動につながる方々にご縁をいただくことができたのも、大きな収穫でした。また、大学内部のことではありますが、このような機会を設けてくださった URA のみなさま方にも感謝申し上げます。